



「笑顔とつながり」

# 永田台

サステナブルスクール

No.526 12月号  
横浜市立永田台小学校  
TEL(714)4277  
令和元年11月29日



進んであいさつ  
笑顔あふれる  
住みよいまちに



## 『おこだでませんように』

校長 武山 朋子

授業中の廊下を歩いていたら、誰もいない教室に一人の子どもが学習ボランティアの先生に付き添われて入っていきます。確かこのクラスはほかの教室でお習字の授業を受けていたはず、と思い、声を掛けました。

「どうしたの？」 「ない。」 「お習字の道具？」 「持ってきたのに、ない。」

どうやら自分の習字道具がなくて、お習字の教室から戻ってきたようです。ロッカーには入っていないのを確かめると、そのままたずずんでいます。ボランティアの先生は何も言わずに付き添っています。

「忘れてきちゃったんじゃない？」 「持ってきた…」

ちょっと声に自信がなさそうです。それでも「忘れた」とは認めたくない様子です。

「もしかしたら、持ってきたつもりだったんだけど忘れてしまったのかもしれないよ。玄関まで持ってきたのにそのまま置いてきちゃったことって、校長先生もあつたなあ。」

そう声をかけると、ぱっと顔を上げ、うなずいて教室を後にしました。

この子は習字道具を忘れてきたことを、本当は分かっていたのかもしれませんが、でも、忘れずに持ってこようという気持ちはきっと強くもっていたのでしょう。だからこそ、忘れてしまった自分、そして先生に「忘れました。貸してください。」と言わなくてはいけない自分がやるせなかったのかもしれませんが。

『おこだでませんように』は、ある絵本のタイトルです。

「ぼくは、いつでもおこられる。家でも学校でも…。休み時間に、友だちがなかまはずれにするからなぐつたら、先生にしかられた」で始まります。

主人公の「ぼく」は、やることなすこと、お母さんにも先生にも怒られてしまいます。本当は優しくするつもりだったのに、本当は友達を助けるつもりだったのに…。本当は…。そんな「ぼく」が七夕の短冊に一生懸命書いたのが「おこだでませんように」という十文字でした。



この絵本の作者くすのきしげのりさんの言葉です。「子どもたち一人一人に、その時々で揺れ動く心があります。そして、どの子の心の中にも、祈りのような思いがあるのです。私は、そんな子どもたちの心の動きや祈りのような思いに気づくことができる大人でありたいと思います。」

個人面談が続いています。一人一人の子どものふるまいを大人の目でとらえながらも、その奥底にある「祈りのような思い」を、保護者の方と担任とで語り合い気付きを共有できたらありがたく思います。そして、そのまなざしを、学校の子どもたちすべてに向けていただけたらすてきだなと思っています。